



辰巳小だより

江東区立辰巳小学校
校長 景山 賢治
学校だより 第3号
令和8年5月30日

(ホームページアドレス) <http://tatsumi-sho.kotn.ed.jp>

「一人一人が輝く」に込めた想い

校長 景山 賢治

今年度は、運動会を10月に移行したことで、4月からの2か月間、じっくりと学級づくりに取り組むことができました。1年生は早くも小学校生活に慣れ、学習や当番活動に意欲的に取り組んでいます。「こどもまつり」では、つりばりのお店を開くために友達と話し合いや準備を行い、魚を釣った後に、サイコロを振って得点を決めるという工夫をしていました。また、当日に向けて2年生とリハーサルを行い、接客の仕方を学んでいました。他にも、2年生はサツマイモの苗を植えたり、プールのヤゴ救出作戦を行ったりしました。プールで捕まえたギンヤンマのヤゴが羽化し、大きくて美しい成虫を見ることができました。3年生は大豆を植えて、枝豆の収穫や、味噌作りや豆腐作りをしたいと思います。4年生の辰巳の街の魅力探し、5年生のポケットエコスペースでの米作りなど、それぞれの学年が体験を通じた学びを深めています。6年生は「学校のきまり」の見直しを行い、6月から新しい学校のきまりが施行されます。5月下旬に行った日光移動教室でも、一人一人が責任をもって自分の役割を果たし、楽しく充実した3日間となりました。夏休みには、初めて行う5年生の清里林間学校があります。

さて、先日、ある教育系の新聞で、元教員で現在は弁護士として活躍する方のコラムを読みました。その内容は「教員志望者を増やすために、学園ドラマが教師を志望する若者を増やす契機になってほしい」というものでした。これまで多くの学園ドラマが作られ、型破りな教師や劇的な出来事など、現実とかけ離れた学校の姿が描かれました。そのような中で、その方が監修を担当した学園ドラマ『僕達はまだその星の校則を知らない』では、いじめや不登校、教育虐待、教師の長時間労働など、法律の論理では解決が難しいケースに苦悩するスクールロイヤーと、理想の教育観を持ちながら現実の学校現場の矛盾と葛藤する教師たちが描かれました。その中で、生徒の幸せのために何ができるのかを模索する、主人公のスクールロイヤーと教師の心を常に支えたのは、「ほんとうのさいわい(本当の幸せ)」という言葉であり、理想の社会と人間の幸福を求めた、宮沢賢治の想いです。

私の名前も「賢治」であることから、小学生の頃から彼の作品に親しみ、大学生時代には岩手のゆかりの地を訪ねました。そこで感じた想いは、本校の教育理念である、一人一人が輝く「こどもまんなか」の学校に繋がっています。本校が掲げる「一人一人が輝く」とは、こどもたち全員が主人公になることです。誰かと比べて評価するのではなく、こどもたちが自分の興味や特性、自分のペースで、主体的に学び、自分らしく成長する姿を、私たち教職員は肯定的に見守っていきたいと考えています。

これまでの学校では、みんなが同じ目標に向かい、同じ基準に達することや、「みんな仲良く」という名のもとに価値観の共有を求められてきました。それによる教育の成果はたくさんありますが、正義主義や前例主義、時に同調圧力を生み、集団の中に個が埋もれてしまう側面があったことも否認しません。しかし、小規模校の本校だからこそ、こどもたちの発達やニーズに寄り添い、必要があればスピード感をもって教育活動を見直し、柔軟に変えていくことができます。

「ほんとうのさいわい」を求め、こどもたち、教職員、そして保護者と地域の皆様と共に歩み続けること。それこそが、私の目指す学校の姿です。6月には学校公開を予定しています。学園ドラマのような劇的な出来事はおこりませんが、「一人一人が輝く」を目指して行われる日々の教育活動と、こどもたちが主体的に学ぶ「本当の学校の姿」をご覧くださいと思います。